全道老人福祉施設研究大会（第44回老施協研究発表会）　抄録

タイトル：

自分の最期は自分で決める！！
～ケアハウスだからできる終活支援～

キーワード　※３つ記入。

終活
自立支援
ｴﾝﾃﾞｨﾝｸﾞﾉｰﾄ

		法人名	社会福祉法人　刀圭会
施設種別	ケア	施設名	ケアハウス　そうび苑

		氏名	職種	備考
研究者（取組に関わった方のお名前５名まで）	①	佐藤　舞	総務・事務	法人本部
	②	野田　栄美	相談員	ケアハウス
	③	中島　好美	介護職員	ケアハウス
	④			
	⑤			

施設の概要

※ここに記載した内容のうち、発表内容に直接重要な関係を持たない事項については、本資料をもって発表の際の説明から省略してください。

設置主体	社会福祉法人	経営主体	社会福祉法人
開設年月日	平成１０年１１月	所在市町村	帯広市
市町村人口	159,885　人	65歳以上人口（高齢化率）	51,017　人（高齢化率　31.6　%）
利用者定員数	50　人	利用者平均年齢	86.5　歳
職員数	6　人	職員数内訳	介護職　3　名 看護職　0　名
併設施設・事業	デイサービスセンターそうび苑・法人本部		
施設のサービスの概要	天然温泉のある一般型ケアハウス。夏期は足湯を一般開放、認知症カフェや町内の祭りなど地域との関わりを大事に。また、その人らしい生活を送るためにサービスを行っている。		

発表の概要

①取り組んだ課題

・ケアハウス入居者は元気であるがゆえに、将来について“考える習慣がない”入居者が多くその意識をどう変えるかが最大の課題であった。

・「ぴんぴんころりが理想」「ここに居られればいい」と将来への備えを避け、「ここが終の棲家ではない」ということをどこか他人事で現実味がなく、今後のことのみならず、現状のことも家族と話し合っていない人が多数だった。

・家族も家もなく、この先頼れる人がいないと不安を抱える入居者もおり、「これからどうすればいいのか」と相談を漏らす声が見られた。

②具体的な取り組み

●ケアハウスとしての「終活支援」を１年間かけて実施した。

①終活とは一体どういう物なのか、全体像を伝えるために入居者全員を対象とした講話を行った。

②入居者が取り組みやすいエンディングノートを選定し、全員が同じノートで記入を進められるよう施設で購入・提供できる体制を整えた。

③終活に関する内容を「葬儀」「財産」「医療」などのテーマごとに分け、毎月30分程度の終活講座を開催。講座内容をもとに、参加入居者がエンディングノートに記入できるよう支援を行った。

④毎月の講座では、参加入居者同士が体験や思いを共有する場を設け、あわせて個別相談にも対応した。

⑤異なる葬儀社2社への見学ツアーを実施し、入居者が実際の施設を見学することで、現代の最新設備や葬儀のあり方について学ぶ機会を提供した。

③活動の成果と評価

①終活への「縁起が悪い」という固定観念を見直す機会を設け、入居者が終活の必要性に気づくきっかけをつくった。

②「何をすればいいかわからない」という終活への不安を具体的な行動や相談へと導く効果が得られた。

③元気なうちにこそ取り組むべきことに気づき、「今こそやるべき」という目標が生まれた。また、仲間とエンディングノートを書きながら対話することで、その効果がさらに高まった。

●エンディングノートの作成と生前整理を終え、理想的な終活を遂げた入居者を見送り、その過程で法人にも多くの支援をいただいた。
　⇒この経験が、他の入居者が終活に前向きに向き合う後押しとなった。

④今後の課題

ケアハウス入居者50名全員が終活に積極的に取り組めるよう、家族向けに終活講話や個別相談を含む支援体制の充実が必要である。また、「悪化時は退所」という単純な対応にとどまらず、退所後や葬儀など先を見据えた相談ができる施設モデルの構築と継続的な支援活動の推進が求められる。

⑤参考資料など